に最も近く彼を傳した『戰勝記』は「虚僞を惡みて赤裸々の誠を愛し、大膽勇猛にして他人に畏敬せらるゝ人であつた」といふて居るのは、最も當つた批評であらう。

さて今特に此處に書き加へて置くべきことは、彼が立派に修養のある君主であつたことである。荒猪子の如く狂ひまはるのみの王であつたと思つては甚だしい誤解である。彼には『ツザキ・チムーリ』といふ自傳がある。東方トルコ語でかいたもので、之が波斯語に翻譯せられて今日に殘つて居る。また別にその法制ともいふべき『ツヾカツト』なるものがある。政治の方針より始めて、宗教に對する考、軍隊の組織などを仔細に敍述したものである。これ等の彼自身の著述によつても、如何に彼が文明的君主であつたかを想像することが出來る。そうして征戰の間には、どこの國でもやることではあるが、藝能ある士は決して之を殺さず、捕虜として都サマルカンドに送り、そこで各々の藝能をふるはしめ、學者を保護し、學校を建て、自からもトルコ語の外にペルシャ語の智識も持つて、その詩歌をも好んだとのことである。聖典を讀誦したのは幼時からのことで、彼の自傳にも少年の時多くの時間を之に費したとかいてある。當時秩序のなかつた時代、彼の熱心と精力とを征伐の方面に向けて、終に有名な征服者たらしめたものであらうが、もし靜平な世の中であつたならば、彼は必らず他の方面に於てその天才を發揮し、名を史上に殘した人であらうといふのは、英のマルカムといふ人の彼に對する批評である。

一〇　帖木兒と成吉思汗

史家の中には彼に大王の稱を捧げたものもある。もしその經略の跡から見て歴山が大王であり、また彼の後なる